やさしい中国語：外国人向け言語支援活動
説明文

1. はじめに

1-1. 動機

昨年 (2025)、まだ三年生の私は、日本語学科の先輩が企画した「やさしい中国語」という活動に誘われた。その活動は、グループに分かれて、日本人の参加者と一緒に台湾に関する議題を話し合ったり、中国語で自分の考えを発表したりするものである。その際、先輩の活動を指導していた工藤先生にも出会った。活動に参加してみるととても面白く、強い興味を持つようになった。それは、先輩の活動が他の中国語の授業とは異なり、ニュース記事を題材として取り上げ、グループで討論する時間が多く設けられていたからである。他の中国語の授業では文法や単語の習得が重視されており、議題について意見を交換したり発表したりする機会は少ないように感じていた。そのため、私も先輩と同じような形式で日本人に中国語を教えてみたくて、このような活動をやってみたいという気持ちが生まれた。工藤先生が「契約学習」という授業の担当教師であり、指導もしていただけることになったため、四年生の第一学期に私はその授業を履修し、「やさしい中国語」の活動を企画し始めた。

1-2. 目的

本ハンドブックは、外国人への言語支援について興味のある方に参考となることを目的としている。今回は私にとって初めてこのような活動を企画した経験であったため、改善すべき点が多いと思う。本ハンドブックでは、活動の内容だけでなく、活動を構成する過程や実施の中で得られた気づき、さらに参加者からのフィードバックなども含めて整理し、記録したことで、同じような活動に取り組みたい方にとって参考資料となれば幸いである。

2. 作品の構成

本ハンドブックは、主に活動内容と、各回の活動が終わった後で参加者から得られた振り返りをもとにした改善点やその改善方法、さらに私自身の感想や振り返りなど

によって構成されている。

また、活動内容を紹介する前に、「やさしい中国語」を実施するにあたって行った事前準備についても紹介している。例えば、「やさしい中国語」と一般的な中国語の授業との違いや、どのように参加者を募集したのかなどを示すことで、読者がこの活動についてより具体的に理解できるように工夫した。

3. 制作の過程

3-1. 活動後の記録の整理

第一章の目的で述べたように、本ハンドブックは言語支援に興味を持つ人に向けた参考資料とすることを目的としている。そのため、各回の活動内容やそこで得られたフィードバックをできるだけ詳しく記述したいと考えた。しかし、活動は全五回行われ、毎回で多くの情報や参加者の振り返りが得られたので、どの程度の内容を取り上げるべきか、またハンドブック全体の構成をどのようにすればよいのかについて、とても悩んだ。初めに情報の整理を行った際には、多くの時間がかかった。

まず、各回の活動内容から整理を行った。具体的には、各回で実施した内容や、グループディスカッションで参加者にどのような問いをかけたのかなどをまとめた。その後、活動が終わった後で得られた参加者のフィードバックを整理した。例えば、印象に残った点や、振り返りの中で指摘された改善点などである。

さらに、それらの改善点に対して、自分なりの対応方法もあわせて整理し、どのように改善を試してみたのかも記録していた。また、各回の活動後には、自分自身でも感想や反省を記録していたため、それらについても整理を行った。このように情報を取りまとめることで、ハンドブックに載せる内容の全体をほぼ把握することができ、その後の執筆を進めやすくなった。

3-2. 構成の検討

実際、最初に作成したハンドブックの初稿はとても簡単なものであった。私は構成を考えることがあまり得意ではなく、思いついたことをそのまま書いてしまい、内容がまとまりに欠けていた。そのため、自分で多くの部分を削除した結果、逆に内容が少なすぎる状態になってしまった。実は、活動内容のパートには、最初回と最終回の活動記録しか載せていなかった。これは、最初回と最終回を比較することで、活動を

重ねる中で私がどのような変化や成長があったのかを分かりやすく示せると考えたためである。しかし、それだけでは内容として不十分であり、詳しいものとは言えなかった。

その後、私の専題担当の怡人先生と相談したところ、全五回の活動がある以上、もっと多くの内容を書けるはずであるにもかかわらず、当時のハンドブックからは活動の豊かさが十分に伝わっていないという指摘を受けた。そこで、まずハンドブックで何を伝えたいのかを明確にし、それに基づいて全体の構成を決めることが重要であって、内容の整理や記述も進めやすくなったと考えるようになった。

最初、私が考えていた構成は、「はじめに」「活動内容」「振り返り」「おわりに」この四つの部分のみであった。それは、活動の流れを大まかに整理するという点においては、このような基本的な構成で対応できると感じていたからである。

しかし、先生と相談した結果、四つの章だけで構成された内容では細かい部分を十分に伝えることができず、活動の全体像や具体的な過程がうまく表現できていないことに気づいた。このままでは読者にとって分かりにくいかもしれず、構成としてもまだ不十分だと感じた。そこで、「やさしい中国語」とはどのような活動なのか、また、どのような方法で参加者を募集したのかといった点についても、新たに章を設けて説明する必要があると考えた。これらの内容を加えることで、活動の背景や全体の流れがより明確になると考えた。

また、「活動内容」という章についても、そのままでは範囲が広く、内容がやや曖昧であると感じた。そのため、この章の中でもさらに小さな構成を考えて、いくつかの小見出しを設定することにした。そうすることで、自分にとっても内容を整理しやすくなるだけでなく、読者にとっても理解しやすく、読みやすい構成になると考えた。

もともと、「活動内容」の章では、まずテーマを簡単に紹介して、活動で使用したニュース記事などの教材や、各回のテーマに基づいて参加者に討論してもらいたい質問、そして最後に参加者の振り返りしか書いていなかった。しかし、怡人先生は、もし読者の立場であれば、これらの内容だけでなく、どのように毎回のテーマを選んだのか、なぜそのテーマを選んだのか、またそのテーマを通して参加者に何を伝えたいと考えていたのかといった点についても知りたくなるのではないか、という助言をいただいた。さらに、最後の振り返りについても、参加者の振り返りだけでなく、自分やサポーターの振り返りもあわせて載せたほうがよいという意見もいただいた。そのため、「活動内容」の章では、狙いと使う素材、そして参加者・サポーター・私それぞれの

振り返りという小見出しを設定することにした。

全体の構成の中で、「『やさしい中国語』の活動とは」という章を設けた。この章は、怡人先生のアドバイスによって追加したものである。というのも、本来のタイトルでは「外国人向け支援活動」としか書いておらず、この「活動」が具体的にどのようなものであるのかが伝わっていなかったからである。読者は本活動について何も知らない状態で読むことを前提とすると、「やさしい中国語」とはどのような活動なのかを最初に説明する必要があると考えた。そのため、読者の立場に立って、どのように説明すれば一番わかりやすいことを考えなければならないと感じた。このように、最初に「活動」とは何かを説明することで、その後の章を読み進める際に、活動の背景やハンドブック全体の内容をより理解しやすくなると考えた。また、この章について私は特に印象に残っている。ハンドブックを作成する過程で、読者が「やさしい中国語」という活動について理解していない可能性を見落としがちであり、自分の視点だけで書いて紹介してしまうことが多かったからである。その結果、内容が読者にとって分かりにくくなってしまう恐れがあると気づいた。

3-3. 私が混乱していたところ

ハンドブックを作成している中で、完成後にどのように説明文を書くべきかについてもよく考えていた。説明文とハンドブックの内容が重なってしまい、混乱してしまうのではないかという不安があったためである。この悩みを怡人先生に相談したところ、ハンドブックは「やさしい中国語」という活動を紹介するものであり、説明文はそのハンドブックがどのように作られたのかを説明するものであると教えていただいた。説明文は「舞台裏」や「メイキング」のようなものとして考えると分かりやすいという助言も受けた。

一方、ハンドブックを作成する過程で、私は「振り返り」と「おわりに」の違いについても混乱していた。どちらも似ている内容を書くように感じていた時に、怡人先生から、「振り返り」は自分自身が活動全体に対する感想や反省であり、「おわりに」はハンドブックを最後まで読んでくれた読者に向けて伝えるまとめの言葉であると説明を受け、その違いを理解することができた。この助言によって、「振り返り」と「おわりに」の役割が明確になり、内容の整理がしやすくなった。

このように、読者にとって分かりやすい構成や見せ方を意識しつつ、全体のバランスにも注意を払いながら内容の調整を行っていった。その過程では、どのように情報を整理すればより伝わりやすくなるのかを考え、構成を繰り返し見直すことで、内容の流れやつながりにも気を配るようにした。さらに、それぞれの章の配置や順序についても検討し、気軽に読み進められる形になるよう工夫した。

4. 感想

これまで自分でイベントを企画した経験もなく、またそのような活動のためにハンドブックを作成したこともなかったので、最初は具体的にハンドブックの作り方が全然わからなかった。しかし、まずは一歩を踏み出すことが大切だと考え、四年生の後学期の最初の専題会議で、最初のバージョンのハンドブックを怡人先生に見ていただいた。予想していた通り、書き直しや補足が必要な部分が多く見つかり、私は一度少し落ち込んだ。しかし私はすぐに気持ちを切り替え、これは自分にとって重要な課題で、どうしても乗り越えたいことであると思いながら、ハンドブックの修正に取り組み始めた。その後は、毎週の専題の会議ごとに構成を見直したり、内容を補足したりしながら、少しずつハンドブックを改善していった。その間に、怡人先生からさまざまなアドバイスをいただき、それによって自分では気づけなかった視点や考え方に触れることができたことをとても感謝している。

ハンドブックの内容を編集している際、活動資料などを整理する必要があったため、活動についての思い出をもう一度呼び起こすことが多かった。例えば、参加者からの振り返りを読んでいると、その中に書かれた意見やアドバイスを通して、活動中のさまざまな場面を思い出すことができた。そのとき自分には何が足りなかったのか、だからこそこのような指摘を受けたのではないかと考えることもあり、当時の気持ちを強く思い出した。また、参加者と一緒に話し合い、意見を共有したあの時間が懐かしく感じられるようになった。活動の中では、様々な考えや意見を聞くことができ、自分では深く考えていなかったことに気づかせてもらうことも多かった。異なる視点からの声を通じて新たな発見ができることが、この活動の面白さの一つだと感じており、毎回のグループディスカッションをとても楽しみにしていた。

5. おわりに

「やさしい中国語」を通して、参加者が学ぶだけでなく、私自身も活動の実施やその後のハンドブックの編集を通して、これまで知らなかった視点や考え方に触れ、色々なことを学ぶことができたのが楽しかった。今回の活動では改善すべき点が多く、完成度が高いものとは言えなかったが、初めてこのような活動を企画し、実施できたことは、自分にとって特別な経験となった。本ハンドブックを参考にして活動を行う際には、ここで紹介した内容をそのまま活用するだけでなく、それぞれの状況や参加者に合わせて、自分なりの「やさしい」を見つけていただければと思う。また、今後は、今回の活動を通して得た経験を生かしながら、さらに多様な「やさしい」を探っていきたいと思う。